

## 福岡・觀世音寺

かんぜおんじ



(太宰府)

- 1 所在地 福岡県太宰府市大字觀世音寺字堂廻
- 2 調査期間 大宰府史跡第一〇九・一一二次調査 一九八七年  
(昭62)七月～一九八八年四月
- 3 発掘機関 九州歴史資料館
- 4 調査担当者 石松好雄・高倉洋彰・横田賢次郎・森田 勉・赤司善彦
- 5 遺跡の種類 寺院跡
- 6 遺跡の年代 九世紀～一六世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

- 調査地は、觀世音寺南門の前面地域にあたり、現参道の西側の部分である。北半部を第一〇九次調査、南半部を第一一一一次調査とし、二回に分けて発掘調査を実施した。調査面積は、第一〇九次調査が一七九〇m<sup>2</sup>、第一一一一次調査が一四八

〇m<sup>2</sup>である。

調査の結果、掘立柱建物二棟、柵一条、井戸一九基、多数の溝・土坑・ピットなどの遺構を検出した。遺構の時期は大きく第I～III

期に分かれる。第I期は九・一〇世紀で、遺構は井戸SE三一五〇のみである。第II期は二つの小期に分かれ、II-一期は一一・一二世紀、二期は一三世紀前半である。この時期の遺構は東西溝SD三〇〇の南側に集中する。土坑SK三一九五は一一・一二世紀の土坑で、平面は橢円形を呈し、長軸四・〇五m短軸二・六m、深さは一・一五mを測る。埋土からは多くの鋳型片が出土した。周辺からも多数の仏像・仏具類の鋳型が出土しており、鋳造工房の存在を窺わせる。第III期は三つの小期に分かれ、III-一期は一三世紀後半、二期は一四世紀、三期は一五・一六世紀である。第III期には大きな画期がみられる。この時期になつて、東西溝SD三三〇〇の北側に溝や柵で囲まれた建物や井戸・土坑などが出現し、徐々に増加して一四世紀に最盛期を迎える。

以上から、第I期ないしそれ以前には建物が存在せず、南門前面の地域が空閑地であったこと、第II期にはSD三三〇〇を境として南側に遺構が集中しており、第III期になつて北側に遺構が出現することから、この溝によつて何らかの規制を受けていたことがわかる。今回の調査では古代の觀世音寺と関係する遺構は少なかつたが、SD三三〇〇が第II期における觀世音寺境界であったことを示してい

る。また、調査区東端で検出した南北溝SD三一〇〇は、調査区北端で幅四・五m、南端で九mと南側に向かって広くなる。深さは〇・七mを測る。出土した嘉元二年（一一〇四）銘の木簡などの遺物からみて一四世紀の遺構であり、現在の参道と並行していることから、調査区東側で実施された第一三〇次調査検出の南北溝SD三八四〇と対をなす、中世觀世音寺の参道の西側溝と考えられる。

木簡は、調査区東端で検出した南北溝SD三一〇〇から七点、調査区南端中央で検出した一一・一二世紀の土坑SK三三一九五から一点、計八点が出土した。

8 木簡の釈文・内容

- |                                                        |                                                                                                  |                                                      |
|--------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------|
| (3)                                                    | (2)                                                                                              | (1)                                                  |
| ・「南無阿彌陀仏<br>種種因縁 以無量論 照明仏法 開悟衆×<br>・「如是等施 種種微妙 歡喜無厭 求× | ・「嘉元」年十一月卅日<br> | 若人求仏□通達井心<br>父母所生□速□井心<br>身力□大覺力□井心<br>〔井力〕〔大覺力〕〔井心〕 |
| (142)×16×1 019                                         | (354)×52×6 061                                                                                   | (262)×17×4 061                                       |

000000

- (7) .  
於喜  
  
  
  
  
  
當

(62)×16×1 081

- (4) 「華光仙所為 其事皆如是 其兩足聖尊 最勝無倫匹」  
• 「利弗 若國邑聚落 有大長者 其年衰邁 財富  
• ×遊戲汝等於此

(5) 「當與汝爾時諸

(1)は卒塔婆である。上端は圭頭状に作り、左右から三段すり切り込みを入れる。左右両辺は削り、下端は折れである。一段目の切り込みより上部には墨を塗っている。表面の梵字はキリーケで、阿弥陀如来の種子である。その下位は類例から願文と推定される。裏面の嘉元二年は一三〇四年にあたる。その下位には三行からなる墨書きがあり、施主などの名が記されていたのであろうが、わずかに一文

323×33×3 061

字が推測されるのみで、判読できない。(2)は板塔婆である。板目材。

上端は圭頭状に作り、左右から二段ずつ切り込みを入れる。左右両辺は削り、下端は斜めに切断しているが、二次的かどうかは不明である。いわゆる称名である。

(3)～(7)は柿経で、妙法蓮華經、すなわち法華經の経文を写したものである。(3)は下端が折れている以外は原形をとどめる。表面は序品第一の一節で、卷第一の第八四行（以下、行数は大正新脩大藏經による）にあたる。裏面は同第一一七行である。(4)は下端部を若干欠損するが、他は原形をとどめている。表面は譬喻品第三の一節で、卷第二の第八五行にあたり、裏面は同第一一六行である。(5)は上下両端を欠損する。左右両辺は原形をとどめる。現状で中位以下が空白であり、行末部であることを示している。卷第二の第一四〇・一四一行に相当し、表裏の内容は連続する。(6)は上下両端を欠損する。左右両辺は原形をとどめる。表面は授記品第六の一節で、卷第三の第二二三行にあたると推定される。裏面は化城喻品第七の一節で、卷第三の第二二七行である。(7)は上下両端を欠損する小片。ごく一部の文字しか判読できないので、具体的な経文を比定できない。表裏も判別できない。

柿経は一〇〇葉を一単位とする(3)(4)、一〇葉を一単位とする(6)、表裏面が直接に連続する(5)の三通りが存在する。これらが別の柿経であるのか、一連のものであるが、中途で配列方法が変更されたもの

のであるのかは不明である。

(8)は板塔婆。板目材である。上端は圭頭状に作り、左右から二段ずつ切り込みを入れる。左右両辺及び下端は削りである。

#### 9 関係文献

九州歴史資料館「大宰府史跡昭和六三年度発掘調査概報」（一九八九年）

同「觀世音寺—寺域編」（二〇〇六年）

（酒井芳司）

